

# 教育情報 No.10

Educational information

【特集】

02. 人生を乗り越えていく力

東海大学体育学部准教授 柔道全日本男子監督 井上 康生

04. 新たな道德教育の充実に向けて

帝京大学教育学部准教授 飯島 英世

06. 考える道德と知性の役割

プール学院大学教授 越智 貢

08. クローズアップ! 教育の現場

「こころ」に火を灯すエントリー制

岐阜県瑞穂市立穂積中学校前校長 西部 巧

特集

## 教科書になる 道德

本資料は、「教科書発行者行動規範」に  
則り、配布を許可されているものです。

日文の実践事例、教科情報

詳しくはWebへ!

日文

検索

未来をになう子どもたちへ  
日本文教出版



# 人生を 乗り越えていく力

東海大学体育学部准教授  
柔道全日本男子監督  
井上 康生

## 柔軟な指導者でありたい

リオデジャネイロオリンピックでは、選手たちの努力が実り、全階級でメダルを獲得することができた。しかし、反省点は多々ある。メダルの色をもっとよい色にできたのでは……という心残りは、2020年の東京オリンピックで晴らさなくてはならない。リオの余韻に浸る間もなく、新たな大舞台へ向けての挑戦が、すでに始まっている。

柔道は嘉納治五郎先生によって創始された武道であり、特にオリンピックでは日本の選手の金メダル獲得を期待できる競技として、長年大きな注目を集めてきた。しかし、近年では海外の選手の活躍も目覚ましく、従来の練習法や指導法だけではメダルを獲ることがどんどん難しくなってしまった。

現役生活を引退後、柔道の指導者となる道を選んだ私は、日本オリンピック委員会の計らいで海

外留学を経験し、世界でどんな柔道が行われているのかを研究することができた。

日本の相撲のように、外国には外国の、その国に古くから伝わる国技とも言える格闘技がある。海外の指導者は、選手たちになじみのあるこのような格闘技の特長を柔道へうまく取り入れていた。そのため、日本の柔道しか知らないと、海外の選手に対応できなくなってしまうのだ。

柔道は今や世界中で行われているのだから、その国ならではの戦法が生まれるのは、考えてみれば当たり前のことだ。それを研究して克服する方法を考えていかなければ、いくら日本で生まれた競技だといっても、勝ち続けていくことは難しい。

私は留学中、疑問に思うことがあれば、海外のコーチに対して積極的に質問をした。世界と対等に渡り歩いていくためには、まずは相手を知る必要があると考えたためである。

外国との比較だけではない。昔と今とでは柔道のルールも大きく変化している。また、社会の情勢も違う。今の時代だからこそ活用できるものは生かし、よいと思ったものは認めて柔軟に取り入れていくこと。この柔軟性が、監督としてとても重要なことだと思っている。

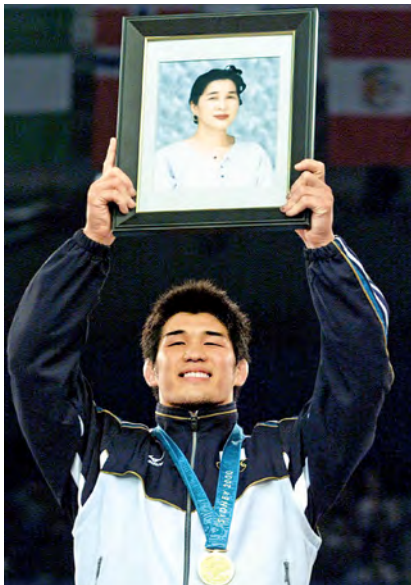
## 柔道を通して学んだこと

とはいえ、礼儀を重んじる古くからの柔道のスタイルを否定するつもりはない。

私は柔道を通して生きる力を学んできたと思っ



世界柔道選手権大阪大会決勝 (2003年、中村博之/フォート・キシモト)



シドニーオリンピック（2000年、ロイター／アフロ）

ている。何事も続けていると、どうしても壁にぶつかるときがくる。それに負けずに立ち向かっていくことで、自己を成長させていく術を身につけてきた。これは、何もスポーツ選手に限ったことではない。誰でも人生において、辛いことや苦しいことがあるはずだ。そういうことにどう立ち向かって乗り越えていくか。これが生きる力だと私は考えている。

選手が不調なときには、課題を明確にするように伝えている。何がよくないのか漠然としたままで繰り返していても、状況は変わらない。まずは原点に戻り、角度を変えて取り組んでみる。これは、なかなか勇気のいることだ。変化をつけると、最初はうまくいかず、どうしても失敗してしまう。しかし、これをおそれてはいけぬ。この失敗の中から不調を乗り越える鍵を発見できるのだ。

私は指導者として、新たなことにチャレンジして失敗している選手については、大いに励まし、その努力を認めるように心がけている。

現役時代、私も不調に悩まされたことがある。勝たなくてはいけない、強くなくてはいけないという、見えない何かに追い詰められているような感覚にとらわれていたとき、今は亡き母からの手紙にあった「初心」という言葉が私を救ってくれた。

—そうだ。柔道が好きだから、今まで続けてきたんじゃないか！

柔道が好き。これが、私の「初心」だった。母が残してくれたこの「初心」という言葉は、今も私の座右の銘である。

## 親子のコミュニケーションと感謝の気持ち

私は5歳の頃から、父が指導者である道場に通っていた。今にして思えば、父はわが子を柔道家として育てたいというよりも、柔道を通して親子のコミュニケーションを築く時間を取りたかったのかもしれない。

こうした中で、自然と礼儀の大切さを学び、その経験が友達の家へ行ったときの挨拶へつながるなど、人間力の礎となる部分を鍛えられていったように思う。

選手たちにも、柔道だけ強くなればよいのではなく、人間力を高める必要があることを述べている。誰しも、自分ひとりの力はたかが知れている。

周囲の人々のサポートがあってこそ、競技に打ち込むことができるのだ。それを念頭に置き、周囲への感謝の心を忘れないようにしたいと、私自身も常々心がけている。

現在、7歳の長女と6歳の長男が遊び感覚で柔道を始めている。楽しみながら体を鍛えてくれればくらいに思っているつもりだが、近くで見ているとついつい熱が入り、声が大きくなってしまるのが困りものだ。

### 著者プロフィール



#### ● 井上 康生 (いのうえ こうせい)

全日本柔道男子監督  
東海大学体育学部武道学科准教授  
1978年宮崎県生まれ  
東海大学体育学部武道学科卒業後、同大学院体育学科研究科修士課程修了  
柔道は5歳のときから始める。内股、大内刈、背負い投げを得意とする攻撃柔道で数々の結果を残した。  
2000年シドニーオリンピック100kg級金メダル、  
1999、2001、2003世界選手権100kg級優勝  
2001～2003年全日本選手権優勝  
2008年引退  
2012年から柔道全日本男子監督  
2016年、2020年東京オリンピックまでの続投決定

# 新たな道徳教育の 充実に向けて

帝京大学教育学部准教授  
飯島 英世

## ① これまでの道徳教育の課題

学習指導要領が一部改正され、特別の教科「道徳科」への移行措置期間に入りました。「道徳科」を校内研究に掲げ、道徳教育の充実に取り組む学校も増えているようです。

そのような状況の中で、学校現場からは「“考え、議論する道徳”とは具体的にどのように進めればよいのか」や「これからは、問題解決的な学習や体験的な学習など、道徳の授業でこれまでと何か違ったことをやらなければならないのではないか」というような声をよく耳にします。

そうなのでしょうか。そこで、これまでの道徳教育と道徳の時間についての問題点を改めて振り返ってみましょう。

昭和33年の道徳の時間の特設以来の大改革となった道徳の教科化の背景には、いじめ問題の解決だけでなく、これまで学校現場で行われてきた「道徳の時間」が道徳教育の要として十分に機能してこなかったことへの反省があります。

平成25年12月の「道徳教育の充実に関する懇談会」報告等、これまでの道徳教育について次のような多くの課題が指摘されてきました。

- 道徳の時間の特質を生かした授業が十分に行われていない。
- 道徳の時間が読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導が行われている。
- 子供に望ましいと思われる分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業になっている。
- 発達段階が上がるにつれて授業に対する子供の受け止めが良くない。
- 学校や教員によって指導の格差が大きい。
- 各教科等との関連を意識した道徳授業が不十分である。

したがって、これからは全教育活動で行われる道徳教育を補充、深化、統合する役割を担う「道徳



科」の授業改善とともに、発達の段階に応じて内容項目を明確に意識した学校生活における道徳教育の充実という双方の改善が道徳教育の実効性を高めるために極めて大切になります。

## ② 道徳科の授業をどう創るか

小学校を例にしますと「道徳科」の目標は次のように示されています。

よりよく生きる基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

「道徳科」の目標は、即ち道徳授業の目標です。つまり、道徳授業が上記の目標を達成できる授業であること、そして子供が主体的に取り組む学習を展開することが「道徳科」の特質であり、これを満たす授業でなければ「道徳科」の授業とは言えない、ということです。

## ③ 自分事として考える授業

「道徳科」の目標や特質を踏まえた具体的な授業づくりはどうあったらよいのでしょうか。

これまでの道徳授業は、導入で主題への問題意識や教材への興味・関心をもたせ、展開前段で中心的な教材を読み、登場人物の心情等について話し合うことを通してねらいとする道徳的価値に関わる考えや思いを深める。それを踏まえて展開後段でこれまでの自分を振り返ったりこれからの生き方について考えを深めたりする。終末では、ねらいとする道徳的価値への思いや考えをまとめたり実践への意欲を高めたりする、このような指導

過程が一般的に行われてきました。

では、「道徳科」の授業はこの指導過程ではだめ、ということなのでしょうか。

そうではありません。これまで、テレビ放送の道徳番組を見せて感想を書かせて終わったり、読み物教材の登場人物の心情を考えさせて終わったりするような形式的あるいは表面的な授業は、自分の生き方についての考えを深めることができる授業へと転換しなければならないということです。即ち、子供が話し合いを通して、ねらいとする価値の大切さや実現することの難しさなど様々な面から考え、その理解を基に自分を見つめ生き方に繋げられる学習にすることです。

つまり、明確な指導観をもち、道徳の時間の特質を踏まえ子供一人一人が自分事として考える道徳授業に熱心に取り組んできた先生方は、授業の方向転換をするということではなく、その質を一層向上させることが大切であるということです。

このように子供が主体的に考え、話し合う協働的な授業を展開することは、即ちこれからの教育に求められる「主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)」であり、「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ(平成28年8月文部科学省)」で示された「何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)」「知っていること・できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)」「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力、人間性等)」という資質・能力を育むことに繋がっていくに違いありません。

#### ④ 問題解決的な学習などの多様な方法

ところで、問題解決的な学習や体験的な学習は全ての道徳授業で行わなければならないのでしょうか。新しい学習指導要領の解説編には「道徳科の特質を生かすことに効果があると判断した場合には、多様な方法を活用して授業を構想することが大切である」と示されています。

つまり、これまでの指導過程の質を高めることを基本に、加えて、効果的な場合には確かな指導観に基づき、問題解決的な学習等の多様な方法を活用するということです。問題解決的な学習では、子供が自分の問題意識をもって追究できるようにすることが大切ですし、道徳的行為に関する体験的な学習では、それを取り入れることにより、切実感をもって考えを深められるようにすることが

大切になります。体験的な学習を取り入れたことで、真剣に考え合う雰囲気を失ってしまうようであれば逆効果、ということになってしまいます。

また、問題解決的な学習や道徳的行為に関する体験的な学習などは、活動そのものが目的ではないということにも注意することが大切です。

#### ⑤ 道徳科の評価

平成28年7月の「道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議」の報告では、「道徳科」の評価について、学習状況や道徳性に係る成長の様子を評価することが示されています。

基本的には、道徳授業を通して一面的な見方から多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分との関わりの中で深めているかといったことについて見取ることが大切です。他の子供との比較ではなく、子供の成長を積極的に受け止め、認め、励ます個人内評価として行うことになります。

勿論、授業で道徳性が養われたか判断することは容易にできることではありません。確かな指導観に基づいた道徳授業を一時間一時間確実にを行い、子供の発言やワークシート、ノートや感想文などを積み上げ、個々の内容項目でなく大きくくりなまとまりで適切に評価をすることが求められます。

今後、各学校の「道徳科」が道徳教育の真の要としての役割を果たせるよう、校長のリーダーシップの下に全教師が協力して指導の質的転換に積極的に取り組んでいただけることを願っています。

#### 著者プロフィール



● 飯島 英世 (いじま ひでよ)

帝京大学教育学部准教授  
1954年長野県生まれ。東京学芸大学卒業、公立小学校教諭、教頭、校長、東京都稲城市教育委員会等を経て、現職。日本道徳教育学会東京支部理事、全国小学校道徳教育研究会顧問等を務めている。



# 考える道徳と 知性の役割

プール学院大学教授  
越智 貢



## 特別の教科「道徳」

学校教育の「道徳」は特別の教科として新たな歴史を刻もうとしている。旧来の道徳の授業が心情理解に偏ったものであるとして、そこから質的転換をはかるべきだという主張が含まれているからである。それを象徴しているのが、言うまでもなく「考え、議論する道徳」という言葉である。

## 考える道徳と発達段階

こうした主張に促され、教師たちは子どもたちに考えさせるための授業方法を模索し始めている。授業中に子どもたちにどのように考えさせればよいのか、議論が苦手な子どもたちをどのように議論へと導いたらよいのか。そのような悩みがしばしば私の耳にも届いてくる。

だが、そのつど私は「考え、議論する道徳」が特別なことを必要とするのだろうかという思いにとらわれる。なぜなら、子どもたちは道徳的問題に遭遇する際に、すべきことやすべきでないことについていつも考えているからであり、すべきかどうかを仲間と相談することも珍しくないからである。誘惑に負け、すべきことができない場合が多いとしても、子どもたちがそれぞれの「考える道徳」や「議論する道徳」を実践していることに変わりはない。

ただし、子どもたちが彼らの「考える道徳」の中で考える程度は発達段階に応じて変わってくる。幼稚園児や低学年の小学生では情緒的な判断が前面に出やすいが、成長するとともに徐々に知的に判断する部分が大きくなる。そのようにして、子どもたちの道徳的な判断は知的能力

の拡大とともに発達する。しかし、それを見通した道徳の授業を私はあまり目にすることがない。

## 道徳と知性 - 「泣いた赤鬼」 -



道徳的な判断が知的に発達するとはどういうことかと首をかしげる人がいるかもしれない。難しいことではない。同じ資料を小学生と中学生に読ませてみれば、その違いがわかってくる。

たとえば、「泣いた赤鬼」。周知のように、この話は、人間と親交を深めたい赤鬼のために、青鬼が犠牲となって赤鬼の願いをかなえるという内容である。小学生がこれを読むと、たいていは青鬼の自己犠牲を称え、友情の深さに感激する。だから、小学校の道徳の授業では、「友情、信頼」の項目のための資料として使われることが多い。

だが、中学生では事情が違ってくる。小学生たちと同じ反応をする生徒たちもいる一方で、小学生にはない反応を見せる生徒が現れる。たとえば、青鬼は道徳的に間違った提案をしたの

ではないか、それを受け入れた赤鬼もやはり誤った選択をしたのではないかと訝る生徒である。彼は、人を欺いて友人を助けることは果たして友情に値するかという問題を考えている。これは目的が手段を正当化しうるか否かという難問でもある。

さらに別の観点からこの資料を読む生徒たちもいる。人間と鬼たちとの関係を異文化理解や多様性社会を考えるためのモデルとして読む生徒、あるいは差別そしてそれを解消するための正義の問題として読み取ろうとする生徒である。彼らにとって、「泣いた赤鬼」はもはや「友情」や「信頼」の物語ではありえない。

## 社会的知性と理由の相違

上記の小学生と中学生との違いはいわば社会的な知性による違いである。それに応じて彼らは同じ話の中に異なった道徳的意味を読み取ることになる。むろん、その違いが年齢と正確に対応するわけではない。それは数学の習得が年齢と正比例しないのと同じである。しっかりした道徳的な判断ができる小学生もいれば、そうできない中学生もいる。しかし、おおよその知的な発達段階が推定され、教科書の内容がそれに従って決定されている。学習指導要領で、道徳の内容が小学生の低・中・高学年及び中学生の課題として4つの段階に分けて記述されているのもそのためである。

では、個々の小学生や中学生の道徳的段階を確かめるには、どうすればよいのだろうか。学級担任であれば自ずとわかるものだが、そうでなくても、簡単に確認する方法がある。子どもたちに行為の理由を聞いてみればよい。

たとえば、なぜ他人の物を奪ってはいけないのかと訊ねてみる。幼稚園児の多くは、親や先生が禁じているから、あるいはそうすれば叱られるからといった回答を寄せる。しかし、さらに成長すると、持ち主が困るから、自分に同じことをされると嫌だからと答える子どもや、盗みは犯罪だから、それは持ち主の権利を侵害するからといった理由を述べる子どもが登場する。

人を傷つけてはならないことや嘘を言うべきではないことを知らない人はいない。幼稚園児

ですら知っている。しかし、園児の知り方と小学生の知り方そして中学生の知り方と大人の知り方は同じではない。道徳の答えは同じでも、その理由(=知り方)は異なっている。それをもたらすのが社会的知性の拡大とそれに基づく道徳性の発達にほかならない。(\*)

## 「考え、議論する道徳」

このように、学校外で子どもたちがすでにそれぞれの段階で「考える道徳」を実践しているとすれば、教師にとって重要なのは、それがそのまま授業の中で言語化されるよう努めることである。その上で、子どもたちの「考える道徳」の相違や共通点について相互に確認し合うことができれば、それだけで「考え、議論する道徳」は実現する。そこで、子どもたちは様々な知り方(行為の理由)を学び、次の発達段階への展望を開くことになるはずである。

(\*)道徳的な発達段階を明示するのは容易ではないが、コールバーグによる「従属罰志向」から「普遍的倫理原理志向」に至る6段階の発達段階論は示唆に富んでいる。彼の認知発達論について異論はあっても、行為の理由付けから導かれた発達段階は今もその意義を失っていない。

### 著者プロフィール



● 越智 貢 (おちみつぐ)

ブール学院大学教授  
広島大学大学院教授を経て、現職。中央教育審議会専門委員、岡山県人権政策審議会委員、広島県公益認定等審議会会長、広島市青少年と電子メディアに関する審議会会長、中国放送番組審議会委員長などを歴任。『高校倫理からの哲学』(共編著、岩波書店 2012)、『教育と倫理』(編著、ナカニシヤ出版 2008)、『岩波応用倫理学講義(7)教育』(編著、岩波書店 2005)その他、多数。

# 「こころ」に火を灯すエントリー制

## — 縦割り集団の取り組みを通して —

岐阜県瑞穂市立穂積中学校 前校長 西部 巧

本校は全校生徒702名の学校です。この4年間、生徒の意欲をどのようにしたら高めることができるのかを考え、実践してまいりました。

本来、教育の目的は、自ら学び、自ら自己実現を図っていきける主体的な生徒の育成にあり、生徒の中にある「こころ」に、やる気の火をつけることが大切なのだと考えました。そこで、本校では、体育祭の縦割り集団の編成にこだわり、そこで編成された団を生かした取り組みを展開することで、生徒のやる気に火をつけようと考えたのです。

以下、そのあらましを紹介します。

### エントリー制

本校では、体育祭を団対抗という形で実施しています。団は1年生から3年生まで、学級を単位として、合体して編成されます。例えば、赤団は3年1組、2年3組、1年6組の3クラスによって編成されます。

従来、こうした団編成はくじ引きによって行ってきました。しかし、平成25年度より、各学級がお互いを指名し合う、エントリー制を導入しました。

まず、5月中旬から、エントリー制を意識した取り組みが始まります。自分たちの学級の課題を克服し、よさをどんどんアピールしていきます。これは1年から3年まで、学年の枠を超えてなされます。生徒集会などの場でも、アピールは行われます。

そして、6月の下旬に、団編成会議が全校生徒の参加の下、開催されます。1年生の各学級が、共に活動したい3年生の学級を指名します。すると、ある3年生の学級に指名が重なることが出てきます。すると、指名を受けた3年生は、学級で、どの1年生の学級と組むかを検討し、回答します。こうして3年生と1年生の組み合わせが決定します。これはまるでプロ野球のドラフト会議のようなものです。続いて、2年生が指名を行います。もちろん、指名する場合も、回答する場合も、なぜ、その学級と組みたいのか、その理由を説明しなければなりません。



このようにして、一つの団が出来上がっていくのです。自分たちが責任を持って選んで、出来上がった団なのです。

左の写真は、最初の指名の様子です。

### 体育祭の取り組み

いよいよ取り組みが始まります。取り組みの中心になるのは、応援合戦です。

毎日、応援合戦の朝練習から一日がスタートします。この時期、遅刻してくる生徒はいません。3年生のリーダーシップの下、2年生も、1年生も必死についていきます。短期間に応援合戦の動作を覚えるのは大変なことで、みな必死の形相です。しかし、3年生は取り組みの期間中の学校生活全般にわたり、下級生を指導していくことになります。体育祭中だからといって、学業や学校の日常生活を疎かにはしません。

こうした取り組みが3週間行われ、体育祭当日を迎えるのです。ここで活躍する団リーダーはみんなの憧れの的となります。



### 体育祭後、そして、合唱祭

体育祭が終わって、団が解散するわけではありません。

日常生活のゆがみやダメなところは団の上級生が指導にあたります。

合唱祭の取り組みでも、団の中で合唱交流が進められます。1年生は、3年生の合唱を間近に聞けるわけですから、大変よい参考になります。この取り組みを始めてから、1、2年生の合唱のレベルが随分と上がりました。

### 未来を創る会

2月下旬、卒業を前にして3年生から下級生に引き継がれる「未来を創る会」

が開催されます。この会では、団別合唱祭が開催され、卒業生と下級生と一緒に取り組む最後の大事な仕事となります。特別な練習時間は確保されませんので、3年生の主導下、自主的に休み時間などを使って練習が行われます。

また、「未来を創る会」では、3年生の生徒一人一人が下級生に、3年間の思いを語る会が位置づけられています。もちろん、同じ団の後輩に向かってです。

### 取り組みの成果は

この取り組みを通して、3年生は最上級生としての誇りと責任を自覚し、

下級生は先輩のよき姿を目にして、その姿を目標として成長することとなります。こうした取り組みを始めて4年、やる気を持った生徒たちは、授業に集中する姿、黙々と掃除に取り組む姿、学級の中で自分の役割を果たそうとする姿、そして、学力の向上、様々な面で、成長していく姿を見せてくれました。やってよかったエントリー制でした。

## 教育情報

No. 10

日文 教授用資料

平成 29 年 (2017 年) 4 月 1 日発行

編集・発行人 佐々木秀樹

発行所 日本文教出版株式会社

〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5

TEL: 06-6692-1261

本書の無断転載・複製を禁じます。

CD33339

## 日本文教出版 株式会社

<http://www.nichibun-g.co.jp/>

大阪本社 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉4-7-5  
TEL:06-6692-1261 FAX:06-6606-5171

東京本社 〒165-0026 東京都中野区新井1-2-16  
TEL:03-3389-4611 FAX:03-3389-4618

九州支社 〒810-0022 福岡市中央区薬院3-11-14  
TEL:092-531-7696 FAX:092-521-3938

東海支社 〒461-0004 名古屋市東区葵1-13-18・B  
TEL:052-979-7260 FAX:052-979-7261

北海道出張所 〒001-0909 札幌市北区新琴似9-12-1-1  
TEL:011-764-1201 FAX:011-764-0690